



イングリッシュ・ナショナル・バレエ学校『ジゼル』より 赤塚えりな、カラム・ローデン Photo: Bill Cooper

7月のイギリス：実り多かった年度末の学校公演

ヨーロッパでは学年末にあたる7月は、バレエ学校の公演が相次ぐ時期でもあります。今月号の日本語ページでは、英国内の主な学校公演についてお伝えします。まずはロイヤル・バレエ学校、エルムハースト・バレエ学校、ランベール・スクール・オブ・バレエ・アンド・コンテンポラリー・ダンスの三校についてマギー・フォイヤーのレポートです。

ロイヤル・バレエ学校は、ロイヤル・オペラハウス内リンバリー・スタジオでの数日間の小規模公演に続き、同校の伝統であるメイン・ステージでのマチネ公演を行いました。「リアム・スカーレット振付の『トッカータ』は緩やかに編まれた新古典主義の作品だ。生徒たちにとっては同校の特色でもあるパ・ド・ドゥ教育の成果を発揮する場であり、特にアンジェラ・ウッドとウィリアム・ブレイスウェルのペアに好感が持てた。『フラクタルズ』は、パリッシュ・メイナードがフォーサイス・テクニク・ワークショップの仕上げに振り付けた純然たる現代作品。若いダンサーたちは水を得た魚のように生き生きと、クラシックの枠を打ち破って踊っていた。チューダーの『リラの園』の難しさはステップ自体ではなく、舞台となった時代の冷たい道徳観を描き、その上に罪の意識を内包した複雑な情熱を重ね合わせていくところにある。生徒たちにとっては貴重な試練だったが、続くマクミランの『コンチェルト』では再び本領を発揮し、技術と音楽性と完成度を試される作品で何人かが最高のパフォーマンスを見せた。最後は恒例のグラン・デフィレ、感無量の面持ちでわが子の姿を誇らしく見守る数百人の父母やバレエファンを前に、大いに盛り上がった。」

「バーミンガム・ロイヤル・バレエに多くの卒業生を送り出してきたエルムハーストでは、この一年間に劇的ともいえる変化が起こっている。ルイス・ターナーのローザンヌ国際バレエコンクールでの成功、芸術監督デズモンド・ケリーの手腕、サミラ・サイディとエロル・ピックフォードの加わった指導陣などが効果を挙げ、学校全体が上昇気流に乗っているのだ。プログラムはピーター・ライト版『コッペリア』第三幕を中心に、

さまざまな難度の練習曲、チェルニーやミンクス曲のナンバーを配した古典の比重が高いもの。峯岸伽奈とアンドリュー・カミングズ（スワニルダとフランツ）は若々しい魅力にあふれ、いくつポイントを外す場面もあったが自信にあふれた舞台だった。」

「バレエが今もランベールの教育の核でありつづけることは、入念に振り付けられ、よく準備された『白鳥の湖』第一幕のワルツからもうかがえた。ボールドウィンの『シンフォニー・インD』は生徒それぞれの個性を前提にした軽快な作品。自由なコンテンポラリーのスタイルで、生きのいいユーモアが散りばめられている。個の尊重は、例年生徒たち自身の振付作品にも見られる特徴だ。今年は古典志向で革新性が弱い作品が大勢を占める中、鈴木竜の『ネージュ』のスタイルが興味深かった。」

ノーザン・スクール・オブ・コンテンポラリー・ダンスの公演は、マイク・ディクソンが取材しました。「マイケル・シューマッカーの『テンポラル・ワルツ』は、私がこの一年間に観た最高の現代作品だ。頻繁な暗転が興を殺ぐダンス作品が後を絶たない中、暗転の用い方がじつに適切なのだ。光の海の中の人々の群れ、懐中電灯を手

にした三人の影が床に倒れた人を覗き込んでいる様子、その場に立ったまま勝手な動きを行うアンサンブルといった物語の断片が情景ごとに完結し、思いもかけない雰囲気の変化に富んでいる。この作品を委託した人、作った人、そしてグレーのオーバーオールを着た十人の卓越したダンサーたちに、最高級の賛辞を贈りたい。」

イングリッシュ・ナショナル・バレエ学校のメアリー・スキーパー版『ジゼル』については、デボラ・ワイスがお伝えします。「同団のバレリーナだったアンドリア・ホールが指導した群舞は完璧だった。ミルタ役のヘザー・ダンが賞賛に値し、カラム・ローデンは繊細で哀れをもよおすアルブレヒトだった。だがなんといっても、この日の真のスターはジゼル役の赤塚えりなだ。若い人ふさわしいすぐれた解釈で、どのステップにも彼女の持ち味である軽やかさがあふれていた。赤塚はすぐにもプロとしての契約を勝ち取るに違いない。マイケル・コーダーの監督就任以来、明らかに学校全体がより強力になり洗練されてきている。」

最後にエマ・マニングより、セントラル・スクール・オブ・バレエについて。「最終学年の生徒たちは卒業前の数カ月間、同校の公演団体であるバレエ・セントラルに参加して、貴重な舞台経験を積み自信をつけてきた。この公演でも多彩で複雑なリフトやパートナーリングを果敢にこなしていたが、見ものやほりクリストファー・ブルースの『シフト』、1930年代の工業化社会の生活をケンジ・パンチのパンチの効いた『スウィフト・シフト』の最終楽章にのせて描いた作品だ。頭にスカーフを巻いて出勤してきた三人の若い工女と恋人たちの関係が育まれ、振付には生産現場での動作が巧みに盛り込まれている。バレエ・セントラルの活動はダンサーが直面しうるあらゆる状況の予習であり、生徒たちは確たる自信を得て巣立っていくのだ。」